わたしと産地の今日をむすぶ

産直365 さんろくご

2022年
10月2回号
（A週）
寒露

pal*system
もっといい明日へ 超えてく

特集

実りの秋、三つの物語。

Contents.

エコ・新潟こしひかり
有機宮城ひとめぼれ
極早生みかん

山が色付き、赤とんぼが舞い、
黄金色の稲穂が頭を垂れる――
今年も胸躍る季節がやってきました。
お米の産地では新米が、
果樹産地ではみかんやりんごが
収穫の真っ只中です。

2022年は大雪に始まり、
穏やかな春を越えたと思えば
猛暑が襲来。
太陽が恋しくなるような
曇天続きもあれば、
東北の一部産地では
大雨による被害もありました。

年々厳しさを増す気象と
世界情勢に振り回されながら、
迎えた実りのとき。
今回は3つの産地の
生産者の魅力に迫ります。

今年も開催！新米キャンペーン

新米を食べて
「“コメ”た思いを送り合おう！」

抽選でごはんがすすむ
プレゼントも当たる！

詳しくは
裏面をcheck

欲しいの声が支えてきた

実りの秋、到来!

取材した人

小柳 浩さん

1969年生まれ。農家に育ち、20歳から徐々に米作りに携わる。今年4月から専業に転身し「こしひかり」「こしいぶき」のほか、枝豆や大豆も栽培。

52歳、満を持しての決断

8月下旬の新潟県阿賀野市、旧笹神村。JA新潟かがやきの「ささかみ」地区では、田んぼが少しずつ黄金色に色付き始めていました。

「7月に梅雨の戻りのような天気になったときはどうかなと思いましたが、今のところは順調で平年並み。あとは最後まで台風がこなければ、というところですね」

稲穂を前にそう話すのは、生産者の小柳浩さん。もともと兼業農家として米を手掛けていましたが、今年4月、30年以上勤めた農協を退職。その決断の背景には、農協職員として地域の農家に関わってきたからこそ感じた、課題があったそうです。

「今、米農家の経営は非常に厳しい状況です。農協でも、米だけに頼らず、枝豆など畑作も増やしていこうと呼びかけているんですが、なかなか『やろう』という人が増えない。それなら自分が見本になろう、と。みんながやりたくなる、稼げる農業を実践するために、農協を辞めたんです」

ささかみの田んぼを、農業を守るべく、自らモデルケースになることを選んだ小柳さん。専業1年目の感想を問うと「去年までは、平日は農協で土日は田んぼ。専業になってからのほうが気持ちはラクです」と笑顔に。どうやら充実した日々のようです。

3年ぶりの交流再開の意義

ささかみではこの春、約3年ぶりに現地で「産地へ行こう。」ツアーが開催されました。感染拡大前に比べるとぐっと小規模にはなったものの、ようやくの再開に、小柳さんは大きな意義を感じていると話します。

というのも、田んぼの担い手が減り、一人あたりの栽培面積が増えている今、手間がかかるエコ・チャレンジ米や有機米を続けていくのは想像以上に大変なこと。生産者のなかに「辞めてしまおうか」という気持ちがよぎることもあります。しかしささかみでは何十年も、食べる人の声が生産者の気持ちを支え続けてきました。

「ささかみの農薬削減米は、40年前に交流で聞いた『安全・安心なお米が欲しい』という声が原点です。今後も組合員さんから『農薬削減のお米が欲しい』と伝え続けてもらうことで、当時を知らない生産者にも『作り続けていかなければ』と思ってほしい。やっぱり直接会って、意見を交わすのがいちばん大事。何より、おいしかったの声を聞くと、1年の苦労が吹っ飛ぶんですよ」

農協職員として、生産者として、多くの人と向き合ってきた小柳さん。その目に映るささかみの未来が安泰であることを、願わずにはいられませんでした。

（写真／豊島正直、文／西谷真実）

8月下旬のささかみ地域のようす。ずらりと並ぶ田んぼが緑から黄色へグラデーションを描いています。

3kgパック

コトコト 376 きなり 304 きなりセレクト 343871

エコ・新潟こしひかり（無洗米）

3kg **1,348**円（税込1,456円）

コトコト 377 きなり 305 きなりセレクト 343889

エコ・新潟こしひかり（無洗米）

5kg **2,230**円（税込2,408円）

コトコト 378 きなり 306 きなりセレクト 136280

エコ・新潟こしひかり

5kg **2,180**円（税込2,354円）

JA新潟かがやき（旧JAささかみ、旧JA北蒲みなみ）、JAえちご上越、JAにいがた南蒲、謙信の郷より。

episode 1.

JA新潟かがやき（新潟県）

2022年4月に新潟県下越地区の5つのJAが合併して誕生。パルシステムには、旧JAささかみ・旧JA北蒲みなみの2地域から米などを出荷しています。今年は3年ぶりに産地ツアーが開催され、待望の対面での交流再開となりました。

episode 2.

長有研（ちょうゆうけん）（長崎県・佐賀県）

名の由来は「長崎有機農業研究会」の頭文字から。2023年で設立40周年を迎える、玉ねぎ、じゃがいもの一大産地。島原半島の南端、南島原に本拠地をおきます。新規就農希望者を研修生として雇い入れ、支援する取り組みが盛んです。

episode 3.

JA新みやぎ（宮城県）

宮城県大崎市、美里町、涌谷町などを管内とする「みどりの地区」から出荷。同地区では、8名の生産者がパルシステムに有機米を出荷しています。7月中旬には記録的な大雨に見舞われ、一部の田んぼが冠水。8月初旬時点で水が引かない地域もあり、収穫量の減少が見込まれます。

100%の力を引き出す

空港から車で1時間半。南島原特有の、細くうねる坂道にたっぷりと揺られたころ、馬場亮輔さんの畑が目の前に現れました。

“みかん歴”はもう30年以上。「といっても5年前までは父親主導で、ようやっと自分のやりたいようにできるようになった」とにやり。「親父の世代は、人間に合わせて仕事するんですが、やっぱり人がみかんの樹に合わせんとだめって思うとですよ」。

そのために今、馬場さんがすすめているのが、みかんの樹の植え替えです。「畑全体に目が行き届かないと、病気が発生して、農薬が必要になってしまう。質もバラつきます。樹1本1本が100%の力を出せるようにするのが、自分の役割です」。

さらには、古い畑は樹々の間隔がせまくて機械が通れなかったり、高く伸びすぎて収穫に脚立が必要だったりと、作業効率の面でも課題があります。

「作業しやすく畑を整備すれば、もっときれいで甘いみかんを作ることができる。いつか、日本一になるんが夢です」

みかんは「奥が深すぎる」

馬場さんを訪ねた7月末は、すでに目がくらむような強い日差しが畑に降り注いでいました。しかしこのあとの夏本番こそ正念場。「草刈りに、マルチ張りに、摘果に……真夏にこれだけみっちり作業があるのはみかんくらい」と苦笑します。

今年の出来を問うと、わずかに渋い表情になった馬場さん。「みかんは収穫後すぐに次の年に向けて肥料をまくんですが、雨が降ってはじめて、樹の根が栄養を吸収できるんです」。今季はいちばん重要な昨年の秋と春先が雨不足で、思うように樹の勢いが戻らなかったそう。「一度失敗すると、3年くらい立ち直りがきかない、それがみかんですけん」。

30年やっても毎年違う顔を見せる。それでも「やっとおもしろくなってきたところ」とどこまでも前向きな馬場さん。

「みかんは奥が深すぎる。自分はまだまだチャレンジャーです」

（写真／深澤慎平、文／富井圭）

小田原・さんまる・無茶々園・西宇和・八女・佐藤農場・長有研・日野江・西九州・北有馬・水俣不知火・草枕・さかもと

コトコト 251 きなり 195 きなりセレクト 341819

エコ・極早生みかん

1kg **378**円（税込408円）

環境に負担の少ない栽培をしています。極早生らしいほどよい酸味。この時季は果皮の色が青めです。大小込み2S-L。

小田原・久望・伊勢・さんまる・紀ノ川・しもつ・無茶々園・西宇和・四国・八女・佐藤農場・長有研・日野江・西九州・北有馬・水俣不知火・おでも会・草枕・さかもと・玄相舎

コトコト 252 きなり 196 きなりセレクト 341827

徳用極早生みかん

3kg箱 **998**円（税込1,078円）

極早生みかんを箱規格でお届け。この時季は果皮の色が青めです。大小込み2S-L。

樹の力を信じてめざすは日本一

取材した人

馬場 亮輔さん

3代目みかん農家。高校卒業と同時に「長男だから」という理由で当初はいやいや就農した。息子は小学2年生のかわいい盛り。

丘の上にある馬場さんの畑は日当たり抜群。奥に見えるのは有明海。

「有機」にそそぐ父と娘の愛のかたち

取材した人

安部 陽一さん・美佐さん

陽一さん（左）：1960年生まれ。1991年ころ慣行栽培から有機栽培に切り替え始め、現在は計60haほどの米を栽培。趣味はカラオケ。

美佐さん（右）：1988年生まれ。Uターンを機に米作りを手伝う。幼少期は就農するつもりはなかったが「社会人経験を経て、米作りの楽しさがわかった」。

開花中はデリケート。強風が吹いて花に傷が付くと、実が入らないことも。

モットーは“徹底してやる”

8月上旬、セミの鳴き声だけが響き渡る、JA新みやぎの生産者・安部陽一さんの田んぼ。風を受けて波のように稲穂が揺れる光景に見惚れていると、白い花をつけた穂が目に入りました。まさに今が出穂・開花期。葉の光合成でつくられたブドウ糖が穂へ届くため、お米にとって大事な時季です。

「花が咲くと楽しみだな。今年はどんなのができっかなって思ってさ。今のところは大きな病気や虫もなくて平年並み。稲刈りまで約1カ月、あとは天候次第だね」

そう言いきるのは、できることはすべてやってきたから。有機栽培は除草剤を使用しないため、7月の草とりは水を張っている田んぼに入り、ひとつずつ手作業で抜いていきます。

「積み重ねだな。雑草をひとつでも残せば、花が咲いて何万粒と種が落ちて雑草が増えるから。来年、再来年のことまで見越して、今年やってるのさ」。ほかにも、冬は田んぼを囲む土の壁「あぜ」を補強。あぜに穴が開くと水が漏れ、春から夏にかけて雑草の発生を抑えるために行う「深水管理」ができなくなるためです。一連の徹底ぶりは、田んぼを見れば一目瞭然。本当に有機栽培か疑いたくなるほど雑草が少なく、立派な稲が頭を垂れ始めていました。

父から子へ継ぐ、有機の極意

2年ほど前、安部家の米作りに加わったのが、次女・美佐さん。事務作業のかたわら、農繁期は陽一さんや10年前に就農した長男・陽介さんと田んぼへ出ています。

「父は米作りを楽しんでいる人。朝と夕方の田んぼの見まわりでは『がんばれ』と稲に声をかけてるんですよ。それに、田んぼ周辺の虫や植物の変化さえも気付いて『こんな虫がいたぞ』と言ってくるくらい、自然も好きなんだと思います」と笑顔で教えてくれました。

美佐さんが今、力を入れているのは両親からの“継承”。手書きの資料のデータ化や陽一さんの頭の中にだけ蓄積された米作りの情報を言語化しているそう。「じつは事務作業も、農業の大きな仕事のひとつ。私は縁の下の力持ちになっていきたい」と意気込みます。その姿に「有機JAS認証の書類の管理もなかなか大変だし、手伝ってもらってちょうどよかったな」と少し照れくさそうに微笑む陽一さん。にぎやかな安部家は、間もなく実りの秋を迎えます。

（写真／豊島正直、文／小方恵実）

商品ポイント +20　2kgパック　新米

コトコト 375 きなり 309 きなりセレクト 343897

有機宮城ひとめぼれ（無洗米）

2kg **1,378**円（税込1,488円）

JA新みやぎより。有機栽培または転換期間中有機栽培。大きめの粒で、さめても粘りがあり、やさしい甘みが特徴。

新米を食べて
“コメ”た思いを送り合おう!

新米キャンペーン

おいしい新米を食べて、生産者にメッセージを送りませんか？
メッセージを送ると、抽選でごはんがすすむプレゼントが当たります。
【対象商品　2022年10月2回～11月1回の新米(予約登録米も対象)】

＼予約登録米購入者は当選確率アップ／

抽選でプレゼントが当たる!

50名
産直豚ロースの味噌漬
(冷凍)10枚1000ｇ

1,500名
炊き込みご飯セット
(五目・たけのこ)2種

step 1 注文する

好きな銘柄のお米を注文。米袋に貼られている
「新米キャンペーンシール」が目印です。

step 2 メッセージを送る

●インターネットで

○「産地へメッセージを送ろう！」投稿フォームで投稿。
※オンラインパルの登録が必要です。

○注文履歴にある「クチコミ投稿」ボタンからメッセージを投稿。
『パルシステムアプリ』、『webカタログ』、『タベソダ』、
『まめパル』からも投稿できます。

●ハガキで

①米袋に貼られている
「2022年新米キャンペーン応募券」を切り取る。
②ハガキに貼り付け、必要事項と
メッセージを記入して郵送。
※郵便料金63円はご負担ください。

※応募の詳細は、米袋に貼られている「新米キャンペーンシール」をご確認ください。

締め切り　2022年11月18日(金)　※郵送は当日消印有効

すると 動画で返事が届く

メッセージに対し、生産者からお返事が届きます。
生産者の本音や産地の今のようすがわかるかも?!
※2023年1月下旬を予定しています。

さらに! メッセージで交流!

動画に対し、感想や質問などを書き込むことが
できます。メッセージはまとめて生産者へお届け。

※いただいたメッセージなどは、パルシステムの公式サイト、
公式SNS(Instagram、Twitter、Facebook、LINE)、
パルシステム各種カタログなどで紹介させていただく場合があります。
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。
※プレゼントは12月以降、順次発送します。

もっと知りたい!

column

2022年産の“コメ事情”。

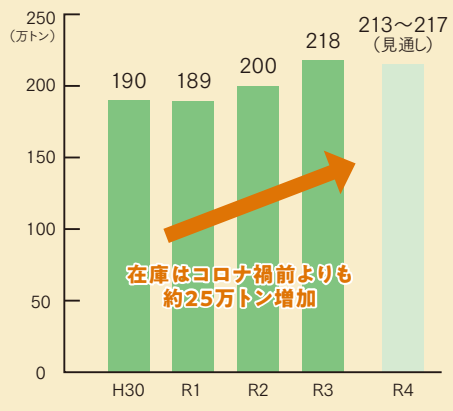
topics 1 昨年から話題の「米余り」の今

感染症拡大にともなう業務用米の需要減と、2020年産から続く豊作によって、米の在庫が過剰となった「米余り」問題。外食需要は徐々に回復しつつあるものの、いまだコロナ禍前の水準には及んでいません。

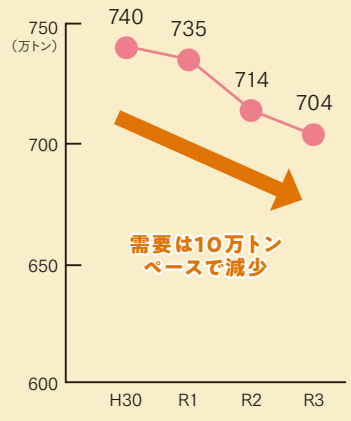
需要回復が見込めないなか、国は主食用米(＝人が食べるための米)の作付けを大幅に減らすよう、農家に働きかけています。全国的にみると2022年産は、昨年比で約4.3万haの主食用米の田んぼが、飼料用米などの別用途や大豆・麦などの畑作へ転換されました。

需要と供給のバランスは少しずつ改善に向かっていますが、問題が完全に解決したとはいえない状況が、今なお続いています。

米の民間在庫量の推移



主食用米の需要量の推移



出典：農林水産省「米をめぐる状況について」「令和3/4年及び令和4/5年の主食用米等の需給見通し」より作成

topics 2 生産コストは大幅に上昇

世界情勢や円安による物価高は、農業にも波及しています。肥料、燃料、コンバインなどの機械、米袋まで、米作りに欠かせないあらゆるものが値上がりしている状況です。昨年は「米余り」によって米価が暴落していたこともあり、全国的には経営が厳しい米農家が多く、田んぼの維持に危機感が高まっています。

パルシステムの産直産地では「予約登録米」の仕組みにより組合員の安定した注文が約束されているため、厳しい状況ながら、生産者は米作りを続けられています。米を食べることが、生産者のくらしや地域の田んぼを守ることにつながっています。